

空腹だも

昭和十九年（一九四四）七月十七日は、中学生だった私達の、殺伐とした青春の旅立ちの日でした。県外の軍需工場への動員命令によって横浜市にある鋳物工場に出動することになったのです。

「午前十時、県公会堂には、盛岡中学校、福岡中学校、岩手中学校、盛岡商業学校、岩手商業学校の各校生徒が参集して：はなばなしく各校合同の壮行式が行われた」（『岩手近代教育史』という状況のもとでの旅立ちでした。この日は、「わずかに濡れを感じさせる霧雨の中」（小野智保君による）でした。こうして私達の空腹の青春が始まったのです。

この動員生活の明け暮れは、敗戦前夜の夢も希望もない、ただ煤煙にまみれた青春模様だったのですが、反面、半年以上も親元を離れ、京浜地区で過ごす異郷生活は、戦時下ながら自由気儘な空気の中で、人生の機微を豊に体験する時間を持って、後年「人生への転機になった」（大沢靖君の言葉）と、受けと

められる青春の「こまであったのかも知れません」。

こうした動員時代の《アリバイ残し》の経緯は、金沢源一君が「はしがき」で述べている通りです。もうかれこれ八年も前のこと、動員先の旧跡訪問をした金子実君の報告が、口火になりました。そして、藤沢芳雄君が精力的かつ根気よく、原稿集めボランティアを続けた結果、二十八人という予想以上の仲間から、貴重な手記が寄せられました。たしか動員参加者は六十二名でしたが、現在まで物故者が十七名、音信不明者が九名もあって、二十八名というのは、連絡のとれる現存者のひとつに約八割ということなのです。

私達が灰色になりかけた脳髓を、びたびた叩きながら書き綴ったはずの手記ノそれを重ね合わせると、動員への出発から、鶴見工場での日々、紫雲寮の夜、休日の首都放浪そして紫雲寮の炎上までの映像が、脳髓の灰色のスクリーンに克明に写しだされてきます。そして、このスクリーンに登場するすべての人々が口を揃えて言うのです。「空腹だ」と。「わがゲートルの青春」の副題を、「空腹エレジー」とすればよかったかなあ、と思うほど、どの手記も「空腹」が忘れ得ぬ思い出の顔となっ

ていて、感無量でした。

編集を終えて、ほっとすると同時に、このささやかな記録のもつ意味ということを考えて見ました。私達ほど昭和の歴史に翻弄された世代はないでしょう。四才で満州事変、小学四年生に日中戦争、中学二年生のときに太平洋戦争が勃発しました。私達は幼児期から少年期を経て青年前期まで「欲しがりません、勝つまでは」の戦時教育を叩き込まれた陰鬱な世代でした。そして価値観が転倒した戦後、私達は戸惑いながらも、いちはやく社会に飛び出したランナーでした。戦後復興のもっともうら若い戦力として。やがて日本経済の繁栄を支え、昭和史の終演とともに定年を迎えました。飽食と放埒のバブルが弾けた今日、戦後経済復興を推進した「空腹」世代の青春の書は、単なる回顧談にとどまるものではないと、思いますかどうでしょうか。

おわりに、この手記作成にご協力いただいた諸兄、並びにすばらしい表紙をデザインして下さった山内君に、拍手をもって「ありがとう」を申し上げます。

平成六年（一九九四年）十二月二十日

岡澤（小泉）敏男記